
幼馴染みがカンフーの達人になっていた場合の対処法について

曾口十土

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼馴染みがカンフーの達人になっていた場合の対処法について

【Nコード】

N0106M

【作者名】

曾口十土

【あらすじ】

太極拳（たいきよく・けん）

代表的な中国武術の一つ。優美な拳勢を備えるが、柔の内に剛を隠し、静の中に動を併せ持つ。

宋の時代に武当山の仙人、張三豊が編み出したという伝説が残る。

（注：本編にはさほど関係ないです）

前編

昔の話で申し訳ないんだけど、ほんの少しお付き合いしてもらえたらと思う。

幼馴染みの紗矢は小学校の頃まで、文句なく「か弱い女の子」だった。背が小っちゃくて、がりがりの痩せっぱち。いつも上目遣いでオドオドした感じだったから、力の有り余った男の子たちによくからかわれてた。

いじめられてる紗矢を助けたことも数え切れない。あいつはちょっとしたことですぐに泣き出してたから、男子たちの格好のおもちやになっていた。

僕はその頃にはもう、父から武術の手ほどきを受けていたから、体が大きいだけのガキ大将を黙らせるのなんて、お手のものだった。学校の帰り道に家の近所の公園で、泣き止まない紗矢をよく慰めていた。紗矢はぐずぐずと鼻をすすり上げながら、いつまでも僕の服をつかんで放さなかった。

「……亮介え」

涙声で僕の名を呼ぶ紗矢。僕は紗矢の手を握り、頭を優しく撫でてやる。そうして隣にいてやって、ようやく紗矢の顔に笑みが戻るのだった。

泣き腫らして真っ赤になった紗矢の顔を、夕方の光がさらに赤く染めた。あの時に眺めた夕日は、高校生になった今とは違っていたように思う。

もっと大きくて、それにずっとずっと赤かった。

まあ、昔の話だ。甘い思い出なのかどうかはともかくとして。

道場の空気がぴんと張り詰めていた。

相対する紗矢は、半身で構えたまま微動だにしない。身長は僕とほぼ変わらない百七十センチちょっと。同学年の女子で一番の長身に道着代わりのジャージを着て、静かに僕を見据える。

小学生の頃のひ弱な面影は、まったく見えなくなっていた。相変わらず痩せ型ではあるものの、細いというより引き締まった体つきだ。少し吊りぎみの目に勝ち気そうな光が踊る。肩まで伸ばした髪を、今は頭の後ろで一まとめにくくっていた。

小学校の終わりごろから、紗矢は太極拳を習い始めた。

紗矢の親父さんは太極拳のスクールを営んでいる。小さな教室だけど意外に受講者は多くて、休日の早朝ともなれば実家の庭は近所のじいちゃんばあちゃんたちのちょっとしたサロンになる。温厚な親父さんの指導のもと、小鳥たちのさえずりを聞きながら太極拳で汗を流す、それはそれはさわやかな光景だ。

それが表の顔。っていうとちょっと人間きが悪いけど、紗矢の家の一角には小さな板張りの部屋があつて、そこが紗矢と親父さんのいわゆる「道場」になっていた。

太極拳を健康体操と侮つてはならない。紗矢の親父さんがスクールの受講者に教えているのはただの健康体操だけど、紗矢に仕込んでいるのは武術そのものだ。

太極拳の源流は重い鎧を着た兵士を押し倒し踏みつけて殺すための技だ。戦乱の時代が過ぎると、平服を着た者同士が戦うように太極拳は進化した。動作にスパイラル状の動きを加えて威力を増したのが新架式、小さく鋭い動きで相手を一瞬で倒すことを目指したのが趙堡架式、つてな具合に。紗矢の親父さんが教える拳術には、そんな戦いの系譜が脈々と生きているのだ。

え？　なんでおまえはそんなことに詳しいのか、つて？　僕の父も拳師で、小さい頃から僕も仕込まれていたんだ。僕の父と紗矢の親父さんは武術家同士で親交があつて、そのおかげで僕と紗矢も幼馴染みつてわけだ。

もつとも、僕は拳術修行を中学の半ばくらいで投げ出しちゃったんだけどね。

当たり前のことだけど、現代の日本は法治国家だ。浪士がばさばさと斬り合いをしていた幕末の日本とか、太平天国の乱で国が荒れまくっていた清朝末期の中国とは違う。平和な日本で拳術を身につけることの意味を、僕は見失っていた。おおざっぱに言えば、いまの世の中で「腕っぷしが強い」なんてことが役に立つのは、子どものケンカの中だけの話だろ、ってことだ。

ところが、紗矢の考え方はまた違うらしい。久しぶりに紗矢の家を訪ねた僕を見るなり、「組み手がしたい」とか言い出して、僕を無理矢理道場へ引っ張っていった。一年半以上も武術から遠ざかって、すっかりボケているこの僕を連れて、だ。ここまで練習熱心だと、紗矢の親父さんもさぞ喜ぶことだろう。物理の宿題を写させてもらおうと思ってた僕には、まさに青天の霹靂だけれども。

紗矢はみつちりと鍛錬を積んでいるようだった。構えを見ただけでも分かる。

掌を下に向けて突き出した右手越しに、紗矢の目が見えた。同じように構えた僕を見ているようで、紗矢は僕のどこにも視線を注いでいない。風景の一部のように僕をぼんやりと眺める。けっして目に頼らず、僕の気配を全身で感じ取っているのだ。

そのくせ紗矢の気配は僕には読めない。まるで道場の空気に溶け込んでしまったように紗矢は静かで、しかも僕は四方八方から紗矢に眺められているような気分だった。

有り体に言って、隙がない。攻め手が見つからない。

試しに左膝の裏を目がけて蹴りを走らせてみる。予測していたように紗矢が足を上げる。

「……くっ！」

足裏で蹴りを迎え撃たれて、僕の脛を鋭い痛みが襲った。紗矢は体のバランスをまったく崩していない。結わえた髪の手が少し揺れただけだ。

さてどうするか。

しょせん女の子なんだから、力任せに打ち込めばなんとかなりそうなもの。だけど、紗矢からはそういう「弱さ」がまったく匂ってこない。

僕は乾いた唇をそつと舌で湿した。

不意に、目に映る紗矢の体が膨らんだ。

間合いを一気に詰められた、そう気づいて僕は身を退く。苦し紛れに飛ばした突きはあっけなく手繰られた。

紗矢の掌打が僕の鼻面を狙う。とつさに顔をそむけて、紗矢の掌は左頬のすぐ横を通り抜けた。

次の瞬間、僕は胸部に強い衝撃を受けた。

体が触れ合わんばかりに踏み込んだ紗矢が、肩をぶち当ててきたのだ。

太極拳の打撃部位は六つ。手、脚、肘、膝、^{こつ}靠（肩や背中での体当たり）、それから頭だ。相手との間合いに応じてこの六つを使い分けるんだけど、当然スムーズに使うには相当な修練が必要だ。普通は使いやすい手脚だけの攻防に、どうしてもなってしまうものだ。それなのに紗矢は流れるように靠を使ってきた。

毎日、道場でむちゃくちゃに鍛えてあるんだ。

僕は本当に驚いた。胸を打たれて息ができない苦しさも感じないほどに。

だってあの紗矢が、だよ。チビで弱々しくって、いつもびびり泣いてた紗矢が。僕の服を握り締めたまま家まで帰っていた紗矢が。こんな、化け物（失礼）みたいに強くなってるなんて。

紗矢が体ごと突っ込んできたもんだから、僕の体勢はあっけなく崩れた。あとは赤子の手を捻るようなもんだ。足を絡められて、僕は無様にも投げ飛ばされた。背中を床に思いつきり打ちつけられて、またも息が止まる。

「……参、つた、……」

あえぎながら僕が言つと、紗矢は大きく眉をしかめてみせた。

「亮介、あんたこんなに弱かったっけ？」

うるさい。どう考えても、おまえが強すぎるんだよ。

そんなふうと言おうとしたけど、横隔膜が震えているらしい。声がうまく出てこなくて、僕は魚みたいに口をぱくぱくすることしかできなかった。

「だからあ、本物の拳師は真剣勝負になったら、そこら中を鮮血で染め上げるもんでしょ。目玉に指を突き入れて、蹴り脚を股からすり上げて金的潰して、心臓の上から肘を刺して、髪の毛を引っ張って鼻面を蹴り上げて、下腹を蹴り潰して膀胱を破裂させて、頭を両手で挟み込んで頸椎を捻る。このぐらいのことを一瞬で全部やらな」と

僕はげんなりしながら、カップに入ったコーヒーをすすった。

ハンバーガーはすでに食べ終わって、トレイの上には二人分の包み紙が丸まって転がる。

隣の席では五十代とおぼしきおばちゃん二人組が、「トキオの中で歌が一番上手いのは誰か？」について熱心に議論している。その向こうの席ではおじちゃん二人が額を寄せ合って、「おれの嫁さん、最近韓流ドラマの話しかしないんだけど……」と世を嘆いていた。

平和だった。

じつに平和なファストフード店の風景だ。

ちなみに紗矢の目はマジだ。こいつはリアル北斗の拳みたいなことを、マジで頭の中で考えてる様子だった。

「紗矢、それって実行したら確実に少女A（十五歳）として警察に連行されるよ。そしたら少年犯罪最前線とか、行き過ぎたゆとり教育の成果とか、扇情的な見出しの三面記事が朝刊に載るよ。できれば幼馴染みの汚れ姿は見たくないんだけど」

「分かってるよ、そんなこと。わたしが言ってるのは心構えの話。」

武術家たるものいつ何時、真剣勝負になるかわかんないんだし、常に想像上でシミュレーションしておかないと」

ああ、そっかあ。紗矢はか弱い少女ではなくなったけど、バカになっただなあ。

僕は少しもの悲しい気分になって、半分ほどに減ったコーヒーにまた口をつけた。

道場でボコられた後、僕は紗矢に「昼飯食べに行こう」と誘われた。高校では同じクラスだから毎日顔を合わしてるんだけど、よく考えたら学校以外で話するのは久しぶりだ。なんとなく懐かしいような気持ちも手伝って、僕は紗矢と連れだって近くのハンバーガーショップに出かけた。

紗矢がこんなバカ話を繰り広げると分かっていたら、のこのことついて行かなかったと思う。

黙っていたら可愛いんだけどね。鼻筋が通った美人顔してるし、背が高くスタイルが良いし。体格の良さに比べてえらく胸が貧しいのが、ただ一つの欠点と言えるかもしれない。中学の終わり頃には男連中からけっこう人気があった。ただ紗矢は頭の中がわりとほんわかしてるから、そういう雰囲気をよく分かってなかったみたいだった。

「ねえ、亮介はさ……」

紗矢がやや視線を落とす。ためらいながら言葉を選んでいるようだった。

「……武術はもう、やらないの？」

背中を丸めて、上目遣いで僕を見る。一瞬、小学生の頃の姿がダブって、僕はなぜだか目を逸らしてしまった。

ガラス窓の向こうでは、晩春のかすんだ空から明るい光が差し込んでいる。日曜日のお昼時で人通りも多く、僕たちと同じような高校生のグループが賑やかに笑い声をあげながら歩いていた。

「しないよ」

顔を外に向けたまま、ぼつりと答える。紗矢が顔を歪めたのが、

空気で分かった。

「腕つぶしが強いかわいかなんて、たいした話じゃないだろ。もう高校生なんだし、ガキのケンカみたいなこと、いつまでもやってられないよ」

「ガキのケンカ、ってなによ」

言い訳みたいにつないだ僕の言葉に、紗矢が気色ばむ。

「強いってのは大事なことだよ。別に他人と比べるわけじゃない、武術の修行は己の内面を鍛えるためのものだ。自分の心を強くしないことには、覇気も活力も出てこないでしょ」

過去のひ弱な自分の乗り越えたという自覚があるだけに、紗矢の語気には頑強さがあつた。というよりも誇りだろうか。

弱い自分を許せないからこそ、強さという価値を追うことに疑いを感じない。そういうある種の偏狭さが紗矢の言葉から立ち昇ってくる。

そんな息苦しさこそが、まさに僕が武術を投げた理由だった。

黙り込んでしまった僕を不満に思うのか、紗矢はうつむいて唇を尖らせていた。

気まずい雰囲気を目魔化そうと僕が口を開きかけた時、レジの方から女性の鋭い悲鳴が響いた。

「うるせえ！ 騒ぐんじゃない、大人しくしろ」

続いて叩きつけるような蛮声。僕と紗矢は同時にレジへと目を向けた。

黒っぽい服装に帽子をかぶった男三人が店の通路に立ちふさがっている。男たちの手に銀色の輝きが見えた。

刃物？

気づいて僕は、体中の血が凍るような気がした。目を血走らせた男たちは、右手に出刃包丁を握り締めている。店員も近くに居合わせた客も、恐怖で顔を引きつらせた。

「おめえらは人質だ。妙な真似すると、ぶっ殺すぞ！」

男が再び声を張り上げた。店内は誰も声をあげる者はいない。不

気味な静寂の中で、スピーカーから流れるBGMだけが寒々しく聞こえていた。

思考が上手く働かない。蜜のように粘りつきながら、ほんの数秒間が過ぎていく。

人質……。瞬時に意味を理解できない単語が、頭の中で明滅した。

建物の外から、「無駄な抵抗は止めて、大人しく出てきなさい」的な説得が多少のハウリング音混じりに聞こえてきた。ガラス窓の向こうに、店をぐるりと囲んだ警察の姿が見える。男たちが店内に乱入してきて三十分そこそこ。警察の手際が良いのか悪いのか、僕には判断できなかった。

店内の客と店員は一カ所に集められ、奥の方の床に座らされた。僕も紗矢と身を寄せ合うようにして、膝を抱えた。

誰もが不安に耐えるように、青い顔をして唇を固く引き結んでいた。僕だつてたぶん、似たような表情をしているはずだ。

「……ねえ、亮介え」

つぶやいた紗矢の声も弱々しい。

「どした？」

「怖い……」

消え入りそうな声だ。形はでかくても化け物みたいに強^{なり}くても、やっぱり女の子なんだ。

紗矢が腕を伸ばして、僕のシャツを力なく握った。

「僕だつて怖いよ。あんな男たちに刃物を突きつけられたら、ね」
いらいらとつま先で床を叩く男の姿が目に入る。僕の口から緊張のため息がこぼれ出た。

気のせいだろうか、紗矢の表情がほんの少し険しくなったような気がした。

「助けてよ、亮介」

「えっと……、助けてって言われても……」

人質となった僕たち十人ほどは、丸く固まって座らされた。それ

を挟むように男二人が立つ。それと店の唯一の出入り口に一人。隙を見て紗矢と二人で逃げ出す、なんていうのはちょっと難しそう。もとい、かなり難しそうだ。

ふと見ると、紗矢が細い眉を思いつきりしかめていた。

「なに、その気のない返事」

へ？ 待て待て、なんで機嫌悪くなってる？

僕が目丸くするのと対照的に、紗矢は切れ長の目を吊り上げた。もともとはつきりとした顔立ちをしているから、感情を顔に出すにより激しい印象を受ける。

「あのねえ、たった一人の幼馴染みが『怖い』って怯えてるんだよ？　せめて手を握って勇気づけるとか優しく肩を抱くとか、少しは男らしいことしてみたらどうなのよ」

「なんだよそれ。なんで僕が……」

口ごもる僕に、紗矢は人差し指をぴんと伸ばしてみせた。

「だいたいね、亮介は昔から強いんだからさ。わたしが泣いてたら助けてくれたし。こんな時こそ、ほら、強いところを見せてくれてもいいんじゃないの？」

「なにを無茶苦茶言ってるんだよ、さっきまで僕を道場でボコってたくせに。僕が強いだなんて、ガキの頃だけの話だろ。僕はもう武術とは縁を切ってるんだ。強いだの弱いだの、そんな価値観を僕に押しつけるなよ」

僕も少し感情的になっていた。紗矢が武術の修練を積む者として、強さを追い求めるのは分かる。でも僕にもそれを求められるのは、少し荷が重かった。

「そもそも強い弱いの話をするんだったらさ、今じゃ僕より紗矢の方が強いだろ。今度は逆に僕を助けてくれてもいいんじゃない……」

「亮介！」

少し口が過ぎたのかもしれない。

紗矢は立ち上がると、いきなり僕の襟元を引っつかんで捻り上げた。怒りに歪んだ紗矢の顔が、すぐ目の前に迫る。

おつかねえと思いつつも、紗矢が何にこれほど怒っているのか、僕は正確なところを把握し切れないでいた。

「おい！ そのジャージ着たでかい女。騒ぐんじゃねえ、座つてろ」

近くにいた男が声を荒げた。包丁を光らせながら歩み寄る。

「……でかい女」

低くつぶやいた紗矢の頬がひくついていた。襟元をつかんでいた手を放すと、紗矢は男に向き直る。

唐突に紗矢が動いた。

左腕を伸ばして、包丁を持った男の右手を押さえる。がら空きになった顔面を目掛けて掌打を飛ばす。

制止する暇もなかった。ぐしゃりと湿った音がして、男が鼻血を吹きながら床に崩れ落ちた。

「この女！」

別の男が駆け寄ってくる。紗矢はすつと目を細めて、膝頭へ蹴りを走らせた。

つんのめるようにして男の体が泳いだ。間髪入れず放たれた紗矢のバラ手突きが、男の顎をとらえる。男の体が横倒しに床へ転がった。

指を開いたバラ手の突きでも、拳法家が使うと恐ろしい威力を発揮する。紗矢の親父さんが厚さ一センチほどの杉板を試割りでぶち破るのを、僕は何度か見たことがある。拳を作らないから腕に余計な力みが入らず、拳速もかなり早い。

最後に残った男は両手をぶるぶると震わせていた。銀色の包丁まで一緒に揺れる。

僕が声をかける間もなく、男が突っ込んできた。何事か叫びながら紗矢に向かって包丁を突き出す。

直線的な動きを、紗矢は静かにかわした。突き出された男の腕を左手でつかんで引く。

同時に紗矢の体がぐるりと回転した。そのまま後ろ回し蹴りを放

つ。バランスを崩した男の体に紗矢の蹴りが巻きついていく。外から回した紗矢の太腿が男の腕に、膝裏が男の肩に、踵が男の後頭部に。

丸太を金槌で叩くような鈍い音が響く。糸が切れた操り人形みたいに、男の体が前のめりに倒れた。

僕は完全に言葉を失っていた。十秒ほどの間に、紗矢は刃物を持った男たち三人を制圧してのけたのだ。

普通、刃物を向けられるのはとんでもないプレッシャーになる。それは武術を習っている者でも例外ではなくて、道場でいい動きをしていても、刃物を向けられた途端に体が動かなくなる、なんてことはよくある。なのに紗矢は何の躊躇もなく男たちに向かって行った。紗矢が自分の強さに絶対的な自信を持っている証拠だ。なんで紗矢はそこまで強さにこだわりを持っているのか。僕にはひたすら不思議だった。

振り返った紗矢は少しだけ悲しそうな顔をしていた。

「……………るいか」

立ち上がって駆け寄る僕に、紗矢は顔を伏せてぼつりとつぶやいた。

「え？」

「わたしだって、…………わたしだって女の子なの！好きな人には守ってもらいたいって思ってるの！悪いか！」

急に顔を上げて紗矢が怒鳴った。その目に透明な滴がみるみるうちにたまっていく。

泣き顔を見るのは何年ぶりだろう。「か弱い女の子」ではなくなっても、紗矢の涙はやっぱりあの頃と同じだった。丸い頬を伝う滴を、僕は魅入られたように眺める。

喋ることもできずに見守るだけの僕へ、紗矢が手を伸ばした。シヤツの襟元をさっきと同じように捻り上げる。

紗矢の赤くなった目が僕をにらみつけた。

殴られる。本気でそう思った。

僕はとつさに目を閉じて、来るべき衝撃に備えた。だけど顔にも腹にも、いつまで待っても痛みはやってこない。

代わりに僕が感じたのは、唇を押さえる柔らかい感触だった。驚いて目を開けると、ぶつかりそうな距離に紗矢の泣き顔がある。重なり合った頬から紗矢の涙が僕にも伝った。

紗矢がゆつくりと唇を離す。瞳を開くよりも先に、紗矢はうつむいてしまった。

軽く握った拳で一つ、僕の胸を打つ。

僕は何も言うことができなかった。指先さえも固まって動かない。唇に触れた柔らかくて温かい感覚だけが、体の中で行ったり来たりしている。

僕たちの沈黙を破ったのは、ガラス戸を破る破壊の音だった。

「犯人確保お！」

靴底の鋲を鳴らして、重装の警官隊が突入してきた。床でのびている三人の男たちにあつという間に群がる。

「怪我はないか、君たち」

僕たちへと駆けて来た警官がそう尋ねる。片手に金属製の楯を持つ物々しい格好だ。でも、紗矢の周りに群がったのは警官だけじゃなかった。

「君？ 君だよ、犯人たちを殴り飛ばしたの。名前は？ 名前は何ていうの？ まだ高校生ぐらいだよな？」

「高校はどこかな？ 何かスポーツをやってるの？」

「こらあああ！ ブン屋ども、現場に踏み入るんじゃないやねええ！」

紗矢を取り囲んだのは新聞やらテレビやらのマスコミ関係者らしかった。

「いいだろうが、もう犯人は取り押さえてるんだ。こちらら報道の自由だ！ で、君、名前は？」

「あの……えつと……三島、紗矢です」

紗矢に何本ものマイクが差し出される。後ろからはカメラが紗矢に向けられていた。

「歳はいくつ？ 凶悪犯を殴り倒しちゃったけど、ボクシングが何かやってるの？」

「高校はどこ？ 刃物を持った男を相手にして、怖くなかったのかな？」

「……ええと」

「これ、夕方のトップニュースで流すからね。さっきのKOシーンもバッチリ押さえてあるから」

「さっきキスしてた男の子は恋人？ なんて、こんな質問はどうでもいいか」

「ちよつと……亮介、助けて……」

紗矢がまた泣きそうな顔になる。

僕はまだ惚けたままだった。頭の中がまだあの温かい感触に支配されていた。

後編

翌日、紗矢にとってはさらに災難な日になった。

「おはよう、紗矢。昨日のテレビ見たよ。紗矢がキスしてたのって、深町君でしょう？」

「ああ！ あたしも見た！ 凄かったよねえ、胸元を引っ張り上げてさ、『唇、奪います』って感じだったし。紗矢って意外と肉食系だったんだねえ」

女の子たちのこんな挨拶が教室の端の方から聞こえてきた。ちなみに深町ってのは僕の名字だ。

男三人を叩きのめしたことはあまり話題にのぼらない。まあ、同級生のキスシーンがテレビに映るっていうのは、ゴシップとしては十分だから無理もない。それにしてもローカルニュースとはいえ電波にそんなシーンを載せるなんて、テレビ局もかなりのレベルだと思う。よっぽど話題に飢えていたに違いない。

女友達からからかわれて、紗矢は耳まで真っ赤になっていた。そんな紗矢に追い打ちをかけるように、授業の合間の休み時間になるとまた違った手合いが現れ始めた。

「ああ、あなたが三島紗矢さん？ テレビで見たわよ、すごい運動能力してるのね。あなたの才能はリングの中で活かされるべきだわぜひ、我が女子ボクシング部へ入部して」

「俗に剣道三倍段と言うように、人間は得物を持つことでさらに強くなる。剣道部へ入部してみないか？」

「来週、他校と空手の親善試合があるんだ。頼む！ 男のフリをして出場してくれ」

そんなわけで、昼休みになる頃には紗矢は机に突っ伏して外界との接触を断ってしまった。

僕は紗矢に声をかけることさえできずに、拒絶オーラを出しまくっている紗矢の背中を見つめるだけだった。紗矢の災難の原因の半

分以上は僕にあることは自覚している。それでも僕は紗矢に何て言えばいいのか分からなくなっていた。

心臓を締め上げるような柔らかい感触が、まだ残っている。

紗矢は「好きな人」って言った。そして僕にキスを。

つまり、そういうことなのだ。

頭の中に記憶されている紗矢の顔に、変なノイズが入って歪んでいく。

僕の中で紗矢のイメージは、あの夕日の公園の風景の一部に閉じ込められていた。背が伸びて、太極拳を習ってたくましくなって、それから昔よりもずっと美人になって。紗矢はあの頃とは違う、別の人生を歩き始めたのだと感じていた。幼馴染みってのは子どもの時の仲の良さを示す言葉で、友達や恋人になり損ねた関係のことだ。僕たちもまた、そういう間柄なんだと思っていた。

でも、そうじゃなかった。身体も心も強くなって僕が守る必要がなくなっても、紗矢は僕を見続けていた。

冷静に頭の中身を整理するにつれて、僕のショックは大きくなっていく。

「なに、深っち、いつからあんな美人と付き合ってたの？ 友達に一言もないなんて、ちよつとばかり水臭いんじゃない？」

隣の席の柿沼がニヤけ顔を寄せてきた。こいつも昨日のテレビを見た口らしい。どうでもいいけど、その気の抜けた呼び方はやめてほしい。

「別に付き合ってない。紗矢とはただの幼馴染み」

「またまたあー、彼氏彼女でもないのに、人前でキスしたりしないでしょ」

猫みたいに目を細めて柿沼が笑う。

「恋人同士だったら、なおさらあんなキスしたりしないよ。僕は…」

まるで噛みつかれたみたいだった。そう言おうとして口ごもる。偽らざる感覚であったとしても、さすがに口にするのは気が引けた。

「ふーん、なんだかよく分かんないけど」

癖の強いの前髪を指先でいじりながら、柿沼が言う。

「付き合ってもいない女の子からキスされても無反応なんて、ヘタレが過ぎるんじゃない？」

分かっている。そんなことは、言われなくてもね。

僕はふと思い出す。昨日、紗矢は怒った。泣いた。僕のせいなのは分かっている。

けれど紗矢がなんであんなに感情をむき出しにしたのか、いまだに僕は納得できていない。

頭では理解できる部分もある。武術修行に血道を上げている紗矢が、好きな人が自分以上に強い人であって欲しいという気持ちを抱くのは、まあ分からなくもない。紗矢と僕を比べても、紗矢の方が強いということも認める。なにせ紗矢は、刃物を持った男三人に対しても一歩も退かないどころか、三步踏み込んで叩きのめしたのだ。強さつてのは、そこまで絶対的な価値なのかな。僕は思わず首を傾げてしまった。

頭でぐるぐると考えている間に放課後になってしまった。よつぱどいたたまれなかったのか、紗矢の姿はすでに無い。

ともあれ、紗矢と話をしなくちゃだめだ。僕は鞆を手に取り、席を立つ。

「柿沼、先に帰る」

「ほい。結末は明日聞かせてよ」

柿沼が頬杖をついて、猫目をいつそう細める。

「もし上手くいかなかったら、おれが紗矢ちゃんにアタックするか」

瞬間的に目つきが陰しくなったのが、自分で分かった。

「バカ、おまえなんかに渡すわけないだろ」

言い捨てて僕は歩き出す。

「がんばれよー」

教室を出ようとした僕の背中を、やけに間延びした柿沼の声が押

した。

日差しが強い。

道路脇の桜並木の若葉が、透いて薄いエメラルドの輝きを落とす。空は染み出してくるような青。

色彩が鮮やかな春はもうすぐ終わる。笑っていたはずの空が涙をこぼす梅雨時が過ぎて、夏がやって来る。

季節がいつのまにか移ろいゆくように、僕と紗矢の関係も変わリつつあった。穏やかな時は去って、雷が鳴り雨が降り、それから――。

気がつくと、紗矢の家が見えてきた。紗矢の家はもとも古い農家で、周囲をぐるりと囲う竹の垣根にも経年の重みを感じさせる。敷地の広さもちょっとしたものだし、出入り口は木壁の長屋門だ。左右が物置になっている門をくぐると、庭に親父さんの姿が見えた。

「よお、亮介君」

紗矢の親父さん――義和さんが剪定バサミを持つ手を休めて、親しげにこちらに手を上げた。僕はやや緊張しながら頭を下げる。義和さんも昨日のテレビを見ているはずだ。見方によっては、僕は愛娘に付いた悪い虫という解釈も成立する。

「こんにちは」

居心地の悪さを隠すように口を開く。そんな僕を見て、義和さんは優しく微笑んだ。

「うちの娘が迷惑かけてるな」

「いえ、そんなことは……」

母屋の方から足で床を踏みつける震脚の音がここまで聞こえてきた。紗矢が道場で套路（型）を行っているのだろ。義和さんがやれやれといった表情で首を振る。

「学校から帰ってから、物も言わずにあの調子でね。あの子なりに落ち込んでいるのかもしれない」

剪定バサミを地面に置いて、伸びを一つ。やや童顔で、本当は四十過ぎだけど三十半ばくらいに見える。笑った顔が丸っこくて、いかにも人の良さそうな感じだ。

「昨日、うちに来て紗矢と組み手をしてたんだろう。どうだった、あの子は強くなっていたかな？」

「強くも何も、一方的にボコられましたよ。紗矢はなんであんなに強くなることに拘ってるのか、僕には不思議で。義和さん、むちゃくちゃ鍛えてるんじゃないんですか？」

昨日、紗矢に肩で打たれた胸に手をやった。痛みはすでに消えている。たぶん紗矢なりに手加減してくれたんだと思う。

「まあ、乞われたことはすべて教えるようにしてはいるがね。別にわたしが特別に厳しい鍛錬を課しているわけじゃないよ。あの子なりの武術へのこだわりがあるようだ」

紗矢の震脚の音はよどむことなく続いた。緩やかに流れたかと思うと、激しく鋭く打ち鳴らす。紗矢が自らを研ぐ音が、僕の胸に迫ってくる。

あんたはどうなの？ たぶん紗矢はそう問いかけているんだ。わたしは昔とは違って強くなった。で、あんたはどうなの？ わたしと同じくらいに強くなってるんだよね？

僕は目を伏せてしまう。途中で投げ出した武術が重しとなって、体中を縛り付けた。どんなに理屈をこねくり回しても、それは僕の弱さだ。

義和さんが微笑んだまま、僕を見つめる。

「あの子はね、亮介君。君を目標にしているんだよ」

「は？」

目上の人の前にもかかわらず、僕は素っ頓狂な声をあげてしまった。義和さんの言ったことが理解できなくて、言葉を失ってしまう。もう武術をやめてしまった僕が紗矢の目標になるなんてことはあり

えないことだ。

義和さんが笑みを崩すことなく僕を見つめる。

「亮介君はあの子の憧れの人なんだよ。ほら、あの子が小さい頃、よく亮介君にかばってもらっていただろう。あの子の中では、その頃の記憶のままで時間が止まってるんじゃないかな」

心の中に小学校の頃の紗矢の顔が蘇る。赤く腫らした泣き顔と、僕を頼り切ったような甘えた笑い顔。

突然、頭の中に光が流れた。

ああ、そうか。だから紗矢は怒ったんだ。

「あの子が武術を習い始める時も、『亮介と同じ武術がいい！』なんて言って聞かなくてね。まさか自分の娘を君のお父さんに弟子入りさせるわけにもいかなくて、ずいぶん弱ったよ」

逆だ、逆だったんだ。

紗矢は強さを求めて太極拳を始めたんじゃない。僕と同じ世界にいたくて、それで武術を始めたんだ。僕を追いかけるようにして修行を積んで。記憶の中の僕を見続けるうちに、結果的に強さを手に入れた。

紗矢にとっては、僕に守られていた小学校の頃の立場が一番居心地が良かったんだろう。なのに、僕はいつのまにか武術とともに紗矢を守れることも放り出してしまった。だから紗矢は「好きな人に守られたい」って言うって泣いたんだ。

「義和さん、紗矢と少し話をさせてもらってかまいませんか？」

「ああ、でもあの子はあの通り……」

ひととき大きな震脚の音が遠雷みたいに響いた。義和さんが呆れたように肩をすくめる。

「聞いている通り、相当カリカリしてるみたいだ。八つ当たりされないように気をつけて、な」

頭を下げてから、僕は義和さんの前を通り過ぎて玄関へと向かった。

別に殴られたってかまわない、と思う。僕と紗矢の心の距離はま

だ遠い。少なくとも無言でキスされるよりはずいぶんマシだ。

「何か用？」

道場をのぞいた僕の顔を見るなり、紗矢がトゲのある声でそう言った。うつすらと汗の浮かんだ額に皺を寄せて僕をにらみつける。

「ちよつと話をしようと思ってさ」

「今日は機嫌が悪いの。また今度にしてよ」

「だめだ。今じゃないと」

思いのほか強い調子の声が出て、自分でも驚いた。敷居をまたぎ床板を踏む足が、他人のものみたいで感覚が遠い。僕が近づくと、紗矢はますます目を吊り上げた。

気圧されたわけじゃないけれど、僕は視線を落としてしまった。いろんなことが頭を駆け巡るのに、いざ紗矢を前にすると思いが言葉にならない。

「その……ごめん」

「なんで亮介が謝るの？」

がらんとした道場に紗矢の声が高く響く。

「わたしが自分勝手だったってだけでしょ？ わたしが勝手に亮介に憧れて、勝手に亮介に守ってもらいたいつて思ってた、わたしが勝手に亮介に、キ、キスしてさ……。謝るのはわたしの方でしょ。」

『勝手に好きになってごめんなさい』ってさ。『わたしの願望を押しつけてごめんなさい』って、そう言えばいいんでしょ！」

「……違うよ紗矢」

「近づかないで！」

歩み寄ろうとした僕に紗矢が鋭く叫ぶ。

「来たらたら殴るからね。昨日みたいに手加減しない、本気で突くからね」

紗矢が腰を落とし、馬歩に構える。その瞳には、仇でも見るよう

な激情がちらついていた。

僕は覚悟を決めて、ゆつくり床板を踏む。

「いいよ、殴っても。それでも僕は」

紗矢のそばに行かなくちゃならない。

「バカにして！ 昔のわたしとは違うんだからね。亮介だつて一発で倒せるんだから」

言葉の通り、紗矢の構えには力がみなぎっている。脚先から手首までの勁けいの通り道がはっきりと見てとれるほどだ。

瞬間的には僕は、ずいぶん昔に父に習ったことを思い出した。

父は言った。もしも打撃に勁を乗せられるほどの使い手を敵に回してしまつたら。もちろんそんな相手とは闘わない方が上策だけれども、不幸にも拳を交えてしまつたら。決して身体に力を入れて防御しようと考えずに、むしろ相手の発する勁に何も抵抗することなく身体を通過させろ、と。拳法家が瓦やコンクリートを試割りするのをおまえも見たことあるだろう。身体に力を入れると、あれと同じように人間の身体も簡単に破壊されるぞ。

緩く息を吐き出しながら、僕は足を進めた。

怯えていたって何を始まらない。幼い頃、紗矢は僕のすぐ隣にいた。その場所は紗矢にとって安住の地だったのだろうけど、僕にとっても同じだった。夕日の公園に閉じ込められた風景を、僕は取り戻したい。

僕がまた一步近づく。一瞬のためらいの後、紗矢の身体が弾かれたゴムみたいに動いた。

脚を鋭く踏み締めて、腰を返す。「勁を発すること矢の如し」という表現が「鄭子太極拳十三篇」の中にあるけれど、まさにその通りに右拳が飛んでくる。何の奇も無い中段突き。だけどそれだけに紗矢の渾身の力が込められていた。

恐怖を抑え込みながら、僕は身体のを抜いて待つ。胸の中央に紗矢の縦拳が吸い込まれた。そして、衝突。

火掻き棒が身体を貫いたようだった。普通に殴られるのとは明ら

かに違う、火傷しそうなほどの衝撃が背中に抜けた。

……クソ親父、嘔吐いてんじゃねえ。めちやくちゃ痛いじゃんか。僕は崩れ落ちそうになるのを必死でこらえた。広がった衝撃で身体が麻痺しそうになる。それが通り抜けると、今度は体中からどつと脂汗が吹き出した。遠のきそうになる意識を懸命につなぎとめて、僕は紗矢に手を伸ばす。

「……ちよつと！」

肩を抱かれた紗矢が抗議の声をあげる。僕は無視して紗矢を腕に抱え込んだ。紗矢を抱き締めたような格好だけど、実は紗矢の身体を支えにしないと僕は立てなかったかもしれない。それほどまでに、紗矢の一撃はありえない威力だった。

「あのな、おまえの突きなんて全然効かないんだよ」

肺が震えそうになるのを気合いで抑え込んで、僕は言った。

「ついでに言うておくけど、紗矢が僕より強いなんて、大きな錯覚だからね。あんなに弱虫だった紗矢に、僕が負けるはずないだろ」
手足まで震えてきた。誤魔化そうとして僕はより強く紗矢を抱き締める。

「だから、これからも僕が紗矢を守ってやるよ。しょうがないからね」

そう。誰かの為にならば、強さを求めることにも意味があるかもしれない。例えば紗矢がまた僕の隣で笑ってくれるのなら。

僕の腕の中で、紗矢は涙を流していた。昔みたいにぐずぐずと鼻をすすり上げて。

「……バカあ、道場で何やってんのよ」

言いながらも、紗矢はおずおずと僕の背中に腕を回す。それから顔を上げた紗矢は、泣いていたけど笑っていた。

「ねえ、亮介」

紗矢の瞳がためらいがちに僕を見つめる。

「太極拳の打撃は六つでしょ？」

「そうだね。相手との距離が遠ければ手脚。少し近づいて肘と膝。

さらに近づいたら頭突きと靠だ」

「あのね、こんなにも近づいたわたしたちはどうしたらいいのかな、
って思うの」

それだけ言ってから、紗矢は目をそらしてしまう。でも背中に回
した手は逆に、少しだけ強めに握られた。

なるほどね。僕は紗矢が考えていることを正確に理解した。

投げ技？ いやいや、そうじゃない。

僕はゆっくりと紗矢に顔を近づける。紗矢は自然な感じで瞼を閉
じた。

二度目に触れた紗矢の唇は、前よりもずっと温かかったように思
う。

その後。

紗矢に縦拳をぶち込まれた胸元は、内出血で赤く腫れ上がった。

あわてて病院に行くと、初老の外科医師から「馬にでも蹴られたん
ですか？」と怪訝な顔をされた。僕は曖昧な顔で笑うことしかでき
なかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0106m/>

幼馴染みがカンフーの達人になっていた場合の対処法について

2010年10月8日14時32分発行